門構えの景
門は数寄屋風で、材は佐渡のアテビである。門をくぐるとすぐに両脇の違った景色が目に飛び込んでくる。一方は低い石積みの中にヤマボウシやヤマモミジを自然風にあしらった景、他方は御簾垣で囲われた坪庭の景である

玄関アプローチ周りの景
アプローチ周辺は、敷き砂によって広々とした枯れ山水を思わせる庭園になっている

林園へ向かう園路の景
玄関アプローチ脇から数枚の飛び石を伝い林園に向かうと、そこは自然風景庭園だ。この庭園は、緩やかにカーブする園路で構成されていて、さまざまに変化する沢流れの景色を見ながら全体を回遊できるようになっている

はじめに

今、ガーデンブームが世の中を一世風靡しており、庭いじりがとても身近な話題の1つになってきている。そして、多くの人が「お庭に愛らしい色とりどりのお花をたくさん植えて、そこでアフタヌーンティーでも楽しみたい」と考えているようだ。

これは、例えどんなに小さなお庭でも美しく整えて、そこでちょっとしたひと時を気分よく過ごしたいという、言わば現代人が歓びの場を持ちたいという欲求の表れであり、庭という身近な自然と人間の関りが気楽なライフスタイルとなって定着してきていることをよく物語っている。

庭は、人にとって最も身近な自然環境であり、プライベートな日常生活の場であり、自分のセンスの自由な表現の場でもある。そして、その場が庭として成立するためには好みや素材や敷地条件ばかりでなく、時代の感性が深く関っている。

この点から言えば、現代の庭は「見る」対象から「使う」対象にシフトし、さらに庭いじりという実体験を通して生命の大切さや相手を思いやる気持ちの大切さに気付いていきながら、さらには学びの心を育てて自分自身も癒されていくといった、まったく新しい時代価値を持つに至ったと言えるだろう。

移りゆく時代の流れのなかで「現代」という時空間を、この緑水荘庭園に素直に刻むことが作庭者自らに求められた使命であり、とても大きな課題であったことをここに記し、現代が求める庭のかたちの1つとして平成15年7月に約2年余りの年月をかけて緑水荘庭園は誕生した。

樹林の隙間から見える力強い護岸石組みと沢流れの景

上 ／ 滝口辺りの流れの景
下 ／ 沢流れの中流にある小滝　の景

樹々のトンネルを通して沢流れを見る、もっとも奥深さが感じられる視点場の景

庭園の概観

緑水荘庭園は大きく分けて前庭、主庭、坪庭の３つの庭で構成されている。

前庭は、公道から竹塀までの入口通路両側の庭で、石積みによって囲まれている。そこにはタブとカヤの巨木を植えて、堂々とどっしりした重量感を印象付けている。このタブ、カヤは共に佐渡の地域性を代表する樹木であり、植栽構成は中間種を省き、林床にはヤブラン、ギボウシを植えて広がりが感じられるおおらかな庭である。

主庭は、さらに３つに別れる。１つ目は沢流れを主体にした自然風景庭園。２つ目は八幡堤のすばらしい景観が見えるのびやかな芝生庭園。３つ目は池脇のプライベート庭園である。

自然風景庭園は、モミジ類を主体に落葉樹で構成された木漏れ日の庭で、強い日差しのなかでもすがすがしい涼風を感じさせる山深い自然の景色がモチーフになっている。

芝生庭園は、会食やパーティーなどができるように計画されており、前面に広がる美しい湖面を見ながらの食事会などには最適な多目的利用空間である。

プライベート庭園は奥まった場所にあり、しかも低い敷地で、さらに周りが樹木で囲われているために、人目を気にせずゆっくりと休息ができるように計画されている。花壇を設えて季節のお花を楽しむこともできる生活観のある庭である。

坪庭は、建物西側脇に位置しており、落葉樹主体の自然生態的な庭園である。ここでは林床はできるだけ自然に任せておき、野草を大切に育てながら美しい空間に誘導していこうという考えが基本の庭だ。

これらの庭園は、いずれも夜間利用が可能なように庭園全体に庭園灯が適所配置されており、夜ともなればその雰囲気を一変させる。庭園灯に浮かび上がる幻想的な眺めは、庭園をより一層魅惑的なものにしている。

庭園の見どころ

古来より日本庭園の多くは、さまざまな自然の美しい風景を庭園に取り入れて「景色」として完成させてきた。桂離宮の天橋立、水前寺成趣園の富士山、小石川後楽園の京都嵐山や木曾谷の風景などがその代表的な例である。これらの場合、狭い空間のなかに自然の風景をそのまま持ち込むことができないためにさまざまな工夫がなされている。「縮景」もその１つだ。

縮景とは、簡単に言えば景を小さくして庭の中に持ち込む技術である。がしかし、単純に縮小した景色ではなく、ある部分を強調したり、省略したりして秩序あるまとまりとして完成させる表現のことである。

ところで、ここ緑水荘庭園の沢流れとその周辺の景色は、この縮景の技術で造られている。

当初地形がほぼ平坦であったために、深く切り下げて起伏をつけてそこを沢流れとし、掘った土を周辺に盛り上げてさらに高低差をつけて奥深い山の雰囲気をつくっている。沢流れの護岸には大ぶりの石をふんだんに使い、上部から沢流れの方向に滑り落ちてきた石が最後に留まったかのように配石して、どっしりとした安定感を表現している。河床には、小さ目の転石をあたかも転がり着いたかのように付近に配置し、沢流れの周辺はスギゴケなどで覆い、アセビやツツジ類、セキショウなどでさらに自然らしさを強調し、高木樹木は沢流れ近くにはあまり栽植されておらず、全体としてはおおらかで広がりのある景色となっている。

園路の景 1
芝生広場のほぼ中央を走る園路、維持管理のための軽自動車が通行可能である。また園路の中央部分に芝生を張り、両サイドの芝生を視覚的につないでいる

園路の景 2
曲線が広い芝生広場に動きとリズムを与えている

園路の景 3
プライベート庭園に向かう園路の階段（砂利洗い出し仕上げ）

プライベート庭園に向かう園路の景
庭園奥の低地には、花壇があり季節のお花を楽しむことができる。そして人目を気にせずゆったりとした時間を過ごすためのプライベートな庭園でもある

デザインが意図したもの

一般に住宅庭園のデザインプロセスは、庭園となる空間を塀や生垣で囲い、どこから何をどう見るかといった視点場に注目しながら景の連続変化を有機的に繋ぎ合わせて、そこで発生する機能面や景観面についてのいろいろな問題を解決に導くことであると言える。

例えば、客間から隣家の立ち振る舞いが丸見えでは困るし、玄関までのアプローチはどこよりも安全で歩きやすくなくてはいけない。住宅も庭もお互いにバランスがとれていて、かつ価格的にリーズナブルであることも重要な要素だ。

ところで、庭園をデザインする場合に安全性、快適性、芸術性など細かいところまで検討し、バランスよく収めていくのはもちろんだが、特に庭園全体に流れる「空気＝雰囲気」に注意を払うことが大切である。すぐれた庭園に一歩足を踏み入れた瞬間、ハッとすることがあるだろう。それは庭園全体に流れている雰囲気を観る側が読み取り感じた瞬間であり、とてもキリッとしていい気分になる。このような雰囲気はあらかじめ正確にデザインすることは難しい。しかし、日本庭園の場合、長年の時間経過がもたらしたしっくり感（時間美）と手入れ（維持管理）という不断の丹精によって、作庭当初にデザイナーが意図したある種のかたち（秩序世界）に庭園を誘導することができる。

このような観点から、今後、緑水荘庭園がこの独自な場所として立ち上がってくる雰囲気のようなものを作庭者らが発見もしくは予測して、さまざまなイメージを膨らませながら誘導を行い、その結果として数年を経て最終的に現時代の「感性」のようなものを形作ることができれば、これはガーデニズム（庭の心）の1つの表現と言えるのではないだろうか。

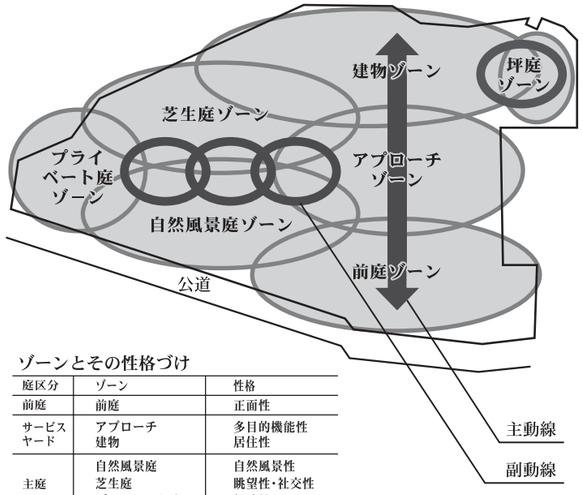
緑水荘庭園

ゾーニングから平面プランへ

ここで思い描く庭園のイメージをより具体的なかたちにするために、眺望、高低、方位、日照などの土地条件と人がどう動くかといった動線の２つに注目して、それぞれ７つのゾーンに分割してみた。

左図をご覧いただくと分かりやすい。まず公道から建物までが主動線で、人と車が頻繁に往来するメイン道路と考えていい。この主動線は、それぞれ前庭ゾーン、アプローチゾーン、建物ゾーンをほぼ直線に結んでいて、できれば玄関前に車がつけられ、かつ前庭ゾーン、アプローチゾーンのそれぞれに数台ずつの駐車スペースを設けたい。

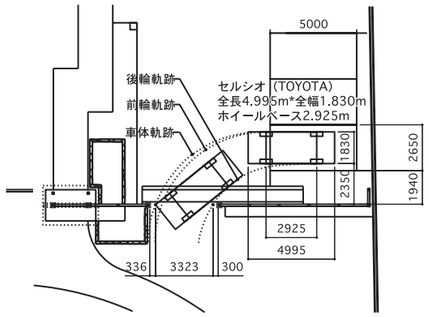
次に主庭では、これをそれぞれ３分割して自然風景庭ゾーン、芝生庭ゾーン、プライベート庭ゾーンとした。これらはそれぞれに独立した景と機能を持つが、いずれも回遊園路で結ばれ連続して歩きめぐることができる。



ゾーンとその性格づけ

庭区分	ゾーン	性格
前庭	前庭	正面性
サービスヤード	アプローチ 建物	多目的機能性 居住性
主庭	自然風景庭 芝生庭 プライベート庭	自然風景性 眺望性・社交性 趣味性
坪庭	坪庭	囲続性・生態性

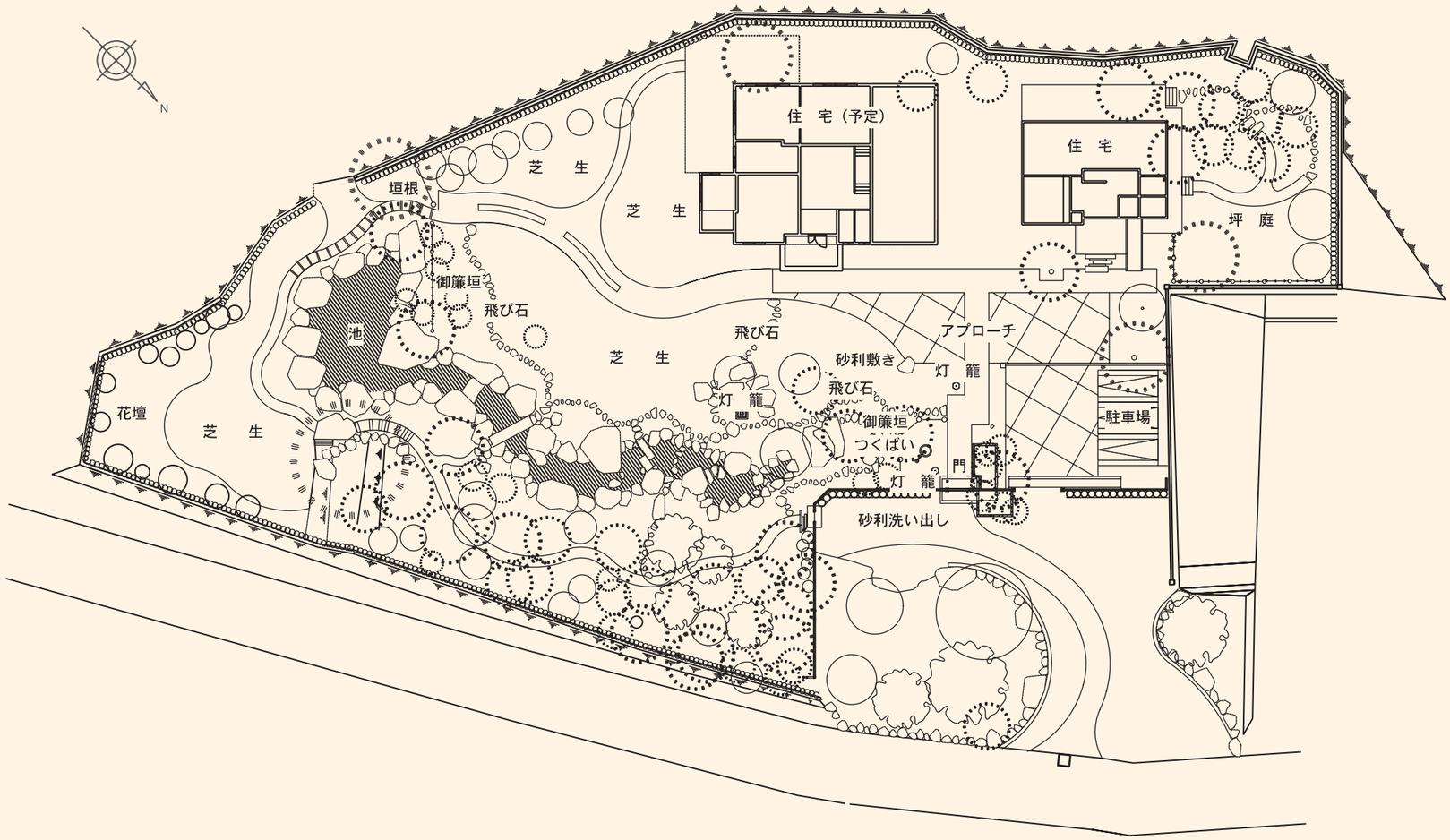
最も塀寄りの駐車スペースから、車が切り返しなしで外部へ出ることが出来るように門の位置と開口幅を求めた。ＴＯＹＯＴＡセルシオの車輌寸法を使って図のように車輌軌跡をシミュレーションすると、開口幅３・９５９ｍのとき軌跡両側に計６３・６㎝の隙間ができる。



車輌動線検討図

つくばいの景
２代目サルスベリ（枯れた親木をそのままに子木が大きく成長した）の根下に石臼型の手水鉢を配したつくばいが主景をつくっている

門前のイメージパース



平面プラン

緑水荘庭園

庭をつくる・協働（コラボレーション）

現場をおさめる技術は、さまざまな経験や試行錯誤によって導き出された法則性や論拠を土台にしている。この、現場で磨かれた技術（職能）と協働することは、より良いものをつくるときの必需品である。

特に他業種多職能で構成される庭園の施工現場で、しかも庭園に求められるさまざまな現代機能や設計者の感性を十分に満たすためには、以前にも増してより多くの職能参加が必要となる。

本工事では、造園のほか門塀、水道、電気、門扉、土工それぞれに経験豊かな職能参加があった。中磯園・中川正男氏もその人であり、中川氏が持つ移植技術に造園の多くを支えられた。

中川氏は地元佐渡在住の庭師であり、独学で庭造りを学んだ人である。本工事では樹木の扱いに豊かな経験を発揮されたが、特に大木の移植技術（移植時期・手順・植付け方法）には目を見張るものがあった。庭園内に移植された巨大カヤをはじめ、タブノキ、ヤマモミジ、ヤマボウシなど多くの大木は、そのほとんどが中川氏の技術によって運び込まれ定植されたものである。

現場指揮を取る中川正男氏
大木の移植には、季節の違いや樹勢、根の状態や現場状況など事細かに見極めて判断する豊かな経験と技術が必要である

大型重機で植栽地を締め固めると、移植後に樹木の生長が著しく阻害される
これを回避するため、樹木植栽を工事初期に行うなど植栽地の踏圧防止を行った

国際交流と庭づくり

以前から日本庭園は海外で高い評価を受けている。扱う材料が質素・不完全であるにもかかわらず、それらを使って設える空間構成の巧みさとその質の高さは特に評価が高い。

ところで、本庭園築造中に海外研修生を受け入れる機会があり、短い期間ではあったが、庭園内で直接実技指導ができた。研修生はドイツ・ライプチヒ出身の女性造園家で、ドイツの大学で日本庭園を専攻した人である。

実技作業は樹木の剪定、植付け、飛び石据付け、掃除などの基礎項目であった。実作業を通して机上（計画）と現場（技術）の距離を少しでも埋めることができたことであろう。研修生にとって短期間でしかも慣れない作業であったと思うが、この経験を生かして、是非とも自国で本格的な日本庭園をつくってもらいたい。そして、それらの日本庭園を通して国際文化交流の一翼を担ってくれたら大変意義深いものとなる。

海外研修生
樹木の扱いや剪定、スリング（ロープ）のかけ方などを学ぶ

【緑水荘庭園の設計趣旨】

計画地は、南東眼下に八幡堤を見下ろす高台に立地し、南方に佐渡連山を見渡せる奥行き感のある「佐渡の奥座敷」と呼ばれる環境を有している。最大限これを生かすようにデザインのイメージを膨らませながら、計画とプレゼンを行い、その過程で「自然味と洒脱な社交庭」というテーマを設定。後に市民に愛されるオープンガーデンとしての利用も踏まえた新しい庭園を目指した。

庭園は前庭、主庭、坪庭の３つの庭で、前庭は、公道から正面竹塀までの間に展開する庭で、タブとカヤの巨木を植えて、堂々としたどっしり感を表現している。タブ、カヤは共に佐渡の地域性種で、植栽構成は中間種を省き、林床にヤブラン、ギボウシなどの地被だけで目線上の広がりを強調した。

主庭は３つに別れる。１つは沢流れを主体とした自然風景庭。２つ目は八幡堤のすばらしい景観が見えるのびやかな芝生庭。３つ目は池脇のプライベート庭。

自然風景庭は、落葉樹主体の木漏れ日の庭で、強い日差しの中ですがすがしい涼風を感じる山深い自然がモチーフになっている。既存の敷地が平坦であったため、深く切り下げ起伏をつけて沢流れとし、掘った土を周辺に盛り上げて築山とした。沢流れの両岸には大振りの石をふんだんに据え、あたかも上部から滑り落ちてきて沢流れ付近で留まったかのように構成。河床には、小さめの転石を置き自然らしさを強調した。

芝生庭は、会食やパーティなどができるように計画し、眼下に広がる美しい湖面を見ながらの催しには最適な多目的空間だ。

プライベート庭は奥まった場所にあり、しかも一段低い敷地で、さらに樹木で囲われているために、人目を気にせずゆっくりと休息ができ、周りには花壇を設えて季節のお花を楽しむ日々の生活の庭。

坪庭は、建物西側にあり、自然生態的な庭。ここでは、できるだけ自然に任せておき、生えてくる野草を大切に育てながら美しい空間に誘導していこうという考えの庭。

The site of Ryokusuiso Garden is located on a knoll from which one can see the Yahata embankment to the southeast. The site also includes an area called Okuzashiki of Sado, (back rooms of Sado). To the south, the beautiful scenery of the Sado mountain range can be viewed. During the process of making the garden, discussions focused on how to make a unique type of garden which the public can also utilize as an open air garden. The garden is composed of three areas: a front garden, a main garden and a small garden. The front garden, located between a public road and a bamboo hedge, creates an atmosphere worthy of dignity by using the enormous trees Machilus thunbergii and Torreya nucifera, both native to Sado island. Emphasis on creating the front garden was on open scenery. This was achieved by not using middle-height plants, but instead by the use of the high height trees Machilus thunbergii and Torreya nucifera and the low ground cover plants Liriopi muscari and Hosta cultivars. The main garden is divided into three: a natural garden, a lawn garden and a private garden. The natural garden has a decorative design of a deep forest landscape. The natural garden is completely occupied with deciduous trees creating a nice dappled shade underneath. Originally the ground was flat, thus excavation was needed to make a stream. The stream plays a very important role, along with the deciduous plants, in making a natural, refreshing garden even in the hot baking sun. The land heaped up near the stream was used to make hills to surround the stream. Large river stones were placed on both sides of the stream and small rounded stones were placed at the bottom of the stream as if the stones naturally moved quietly or smoothly to their present location. The lawn garden is a space that can be used for multi purposes: parties, gatherings, or simply viewing the lovely lakefront scenery. The private garden located at the lower level at the back of the property is encircled by trees for people to relax and enjoy solitude. Also, planting beds are placed in the private garden for people to enjoy the change of seasons. The small garden located on the west side of the building is also designed based on natural landscapes surrounding the site. It was our belief to let plants grow naturally, allowing the integrity of the garden to remain. This tenet of allowing the plants to grow naturally is based on our philosophy that maintaining wild flowers naturally can be made to make the space look beautiful and encourage our minds to appreciate nature deeply.

■作品基本データ

□作品名：緑水荘庭園

□所在地：新潟県佐渡市石田地内

□発注：遠藤　幹彦

□計画及び設計：基本構想　土沼　隆雄
　：基本計画　土沼　隆雄
　：基本設計　土沼　隆雄
　：実施設計　土沼　隆雄
　：設計監理　土沼　隆雄

□計画及び設計協力：Ｔ＆Ｄアソシエイツ

□監理：土沼　隆雄

□現場主任：宮沢　敏雄

□施工：㈱要松園コーポレーション／中磯園／遠藤建設㈱／(有)志和木材／菊池鉄鋼所／力電気商会

□計画及び設計期間：2001年2月～2001年5月

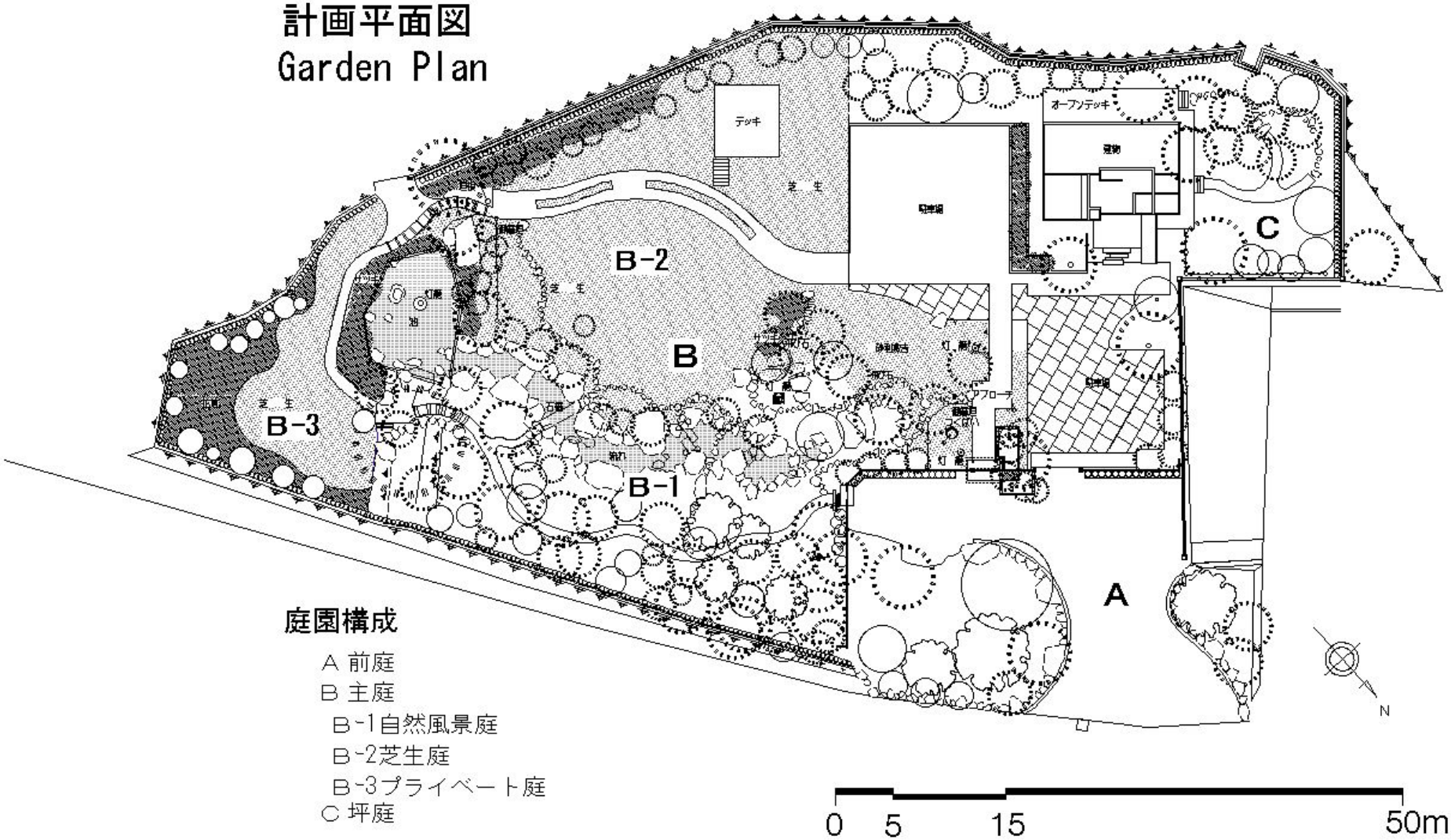
□施工期間：2001年6月～2003年7月

□規模：0.42ha

□種別：日本庭園

□主要施設門：塀、駐車場、自動開閉門扉、通路、園路、滝、流れ、橋、池、芝生広場、木製デッキ、ベンチ

計画平面図
Garden Plan



庭園構成

A 前庭
B 主庭
B-1自然風景庭
B-2芝生庭
B-3プライベート庭
C 坪庭